栄光と悲劇のリュデイア王クロイソス

渡辺　浩

A：先生こんにちは，前回まで4人についてお話をうかがったわけですが，どうもまだ本物のORとは少し違うように思うのですが．

Ω　まあやっと歴史時代に入ったばかりのところだから，あせらずもう少しきいてもらうとしよう．今日はギリシャから一歩ふみ出して，小アジアのリュデイアの王様をとりあげることにしたい．

A：小アジアですか．ますます現代とは縁が遠くなりそうですね．

Ω：リュデイアの現代への文化的遺産の一端にふれようと思えば，ベートーベンの作品132の絃楽四重奏曲や，バルトークのピアノ協奏曲第3番の緩徐楽章で，リュデイア調の敬虔な冥想にひたることができる．

これは現在も地図にみられる小アジア西部の都市サルデイスを中心とする地方にあった国で，ヘラクレスの血筋をひく王朝が500年ばかりつづいていた．しかし22代目の王カンダウレスのふとした軽率な行動のため，王の近臣ギュゲスはわが身を滅ぼすか，または王を殺し王妃を奪って王にかわるかの二者択一の立場に追込まれ，後者の道を選んだのだった．当然先王派との間に一戦がおこるところだったが，デルポイに使を派遣してその裁決に従うことに話がつき，神託は新王を認めて，前652年ここにメルムノス王朝が成立した．このとき新王朝は5代しかつづかないという託宣も同時にもたらされたが，まもなくだれもこれを忘れてしまった．ギュゲスをはじめ，2代，3代，4代と英邁な王がつづいて周辺諸国を征服し，国威は伸張した．内陸交通の要地を占めて商業もさかえ，貨幣を世界ではじめて鋳造したのもこの国だった．

クロイソスが第5代の王位についたときは，リュデイアは小アジア西部の過半を支配していた．沿岸地方のギリシャ人諸都市のうち，大陸にあるものは征服されるか，従属的同盟関係にあった．最大の繁栄を誇ったミレトスも後者に属していた．東方はアッシリヤ帝国の崩壊後アナトリヤ地方を支配していたメデイア王国と，ハリュス河を境として接し，これとも同盟かつ両王家は姻戚関係にあった．クロイソスは沿岸諸島上のギリシャ人諸都市をも征服するために船の建造に着手したが，7賢人の1人プリエネのビアスがあいだに立って，平和裡にこれら諸都市を従属させることになった．まもなく彼はハリュス河以西の小アジア全域を制圧した．

いまや彼には恐れるべきなにものもなかった．周辺の諸強国はすべて盟邦であり，父祖以来の陸兵はよく訓練されてその精強は近隣諸国に並ぶものなく，それに加えて沿岸ギリシャ諸都市の商船隊や海軍をも意のままに動かせることになった．国土は広く肥沃に，経済は発展しつつあり，かつて手を触れるものをすべて黄金にかえたいという伝説のミダス王の国プリュギアもいまは王の治下にあり，王宮の宝庫には金銀が充満していた．全ギリシャをながめても王に匹敵する権勢と富と安寧を享受している人物がいるとは思えなかった．彼はギリシャ文化をとり入れることに熱中した．彼の知遇をえたアテナイの有力者ミルテイアデスは，ダーダネルス海峡付近の地域で支配権の確立に成功し，王の宝庫に入って身につけられるだけのものを持出すことを許されたアテナイ名門のアルクメオンは，その権勢の財政的基礎を確立した．

高名なアテナイの賢人ソロンが諸国を巡遊していると聞いた王は，さっそく礼を厚くしてサルデイスに招聘した．数日間豪華に接待し，王室の宝庫の内部をみせたりした後で，ある日王はソロンに，“あなたは諸国を広くみてこられたが，この世でもっとも幸福な人間はだれであると考えられるか”とたずねた．ソロンは戦に死んだアテナイの一市民の名をあげ，彼は使命を果しながらついに倒れたので，国費で葬られ，多くの人々から惜しまれた，と語った．では2番目に幸福な者は，とたずねられると，老母の願いをかなえるために力をふるって，ついに息絶えた2人の若い兄弟の話をした．王はついに内心を押えかねて，自分をどう思うか，とたずねてしまった．ソロンは現世の繁栄は長つづきしないもので，だれであろうと，他人から惜しまれつつ世を去ったと聞くまでは，その人が幸福だったといおうとは思わない，と答えた．このやりとりで王との間は気まずいことになり，ソロンは早々に王宮を辞去することになった．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

A：先生のお口からこういう人生訓話を聞こうとは，考えてもみませんでした．

Ω：この話はあまりにもうまくできているので，ヘロドトスが伝えて以来，ある人はつくり話であることを証明しようと年代計算に精を出し，ほかの人は蛇足をつけたそうと試みた．年代計算からは，相手がソロンでは少し無理らしい．何年かたって，盟邦メデイアの支配下にあったペルシャ人が，キュロスの指揮のもとに反乱をおこし，メデイア王家を転覆させ，さらに周辺諸国の攻略をつづけているとの情報がつぎつぎに到着した．義兄弟にあたる盟邦の王の敗亡を見すごすことは，王の威信の崩壊につながる，また急激に興隆するペルシャは将来の実質的脅威だった．クロイソスは慎重に開戦の準備にかかった．まず予備調査としてギリシャ各地から北アフリカにいたる諸処の神殿に使を出し，所定の日にリュデイア王クロイソスは，いまなにをしているか？と伺をたてさせた．その日自分は王宮で神に犠牲を捧げていた．帰ってきた使者の報告をきいてみると，デルポイの神託だけが信頼できるように思われた．王はあらためてデルポイに莫大な犠牲と献納品を捧げ，ペルシャ進攻の可否について神託を伺った．その答えは「ペルシャに出兵すれば一帝国を滅ぼすことになろう．ギリシャのなかの最強国を選んで同盟すべし」というのだった．彼はギリシャの最強国を調査し，スパルタとアテナイが他に卓越していることを確認し，さらに両国の内情を調査して，現在同盟国のために出兵できる政情にあるのはスパルタだけであることをしり，豪華な贈物を送ってこれと同盟を結んだ．

王は軍を集めて進発し，ハリユス河を渡ってカッパドキアに進出した．このとき著名なミレトスのターレスが従軍していて，ハリユス河は彼の献策によって渡河できたともいわれる．プテリアでキュロスの軍と会戦したが，勝敗決せず日が暮れた．キュロスの兵力が意外に大きいので，同盟関係にあったエジプト，バビロニアとも連絡をとって出直す気になった王は，敵が攻撃してこないことを見定めて陣を引払った．サルデイスに帰着して軍を解散したが，意外にもその後からはキュロスが一定の間隔を置いて追跡してきていた．クロイソスは手もとの兵をもって迎撃したが，破れ去った．ついでサルデイスの攻囲戦となったが，城壁のもっとも険阻な部分の隙をつかれて落城し，ここにリュデイア王国は滅亡した．これは前546年のこととされる．

クロイソスは捕えられて，薪の山に登らされ，火がつけられた．最期の時にあたってクロイソスは，かつてのソロンのことばを思い出し，“おおソロンよ”と3度声高く叫んだ．キュロスはその意味を訊ねるように命じ，使が薪の山とキュロスとの間を2，3度往復したとき，なにごとかを覚って，急いで火を消すように命じた．もう手遅れだった――が急に嵐がおこり，雨が降り出して火は消えた．キュロスはクロイソスの話を理解し，その縛を解かせ，丁重にもてなした．

ひと息つくとクロイソスには，王都を掠奪暴行しているペルシャ兵の姿が眼に入った．彼は控え目にしかしはっきりと，兵が掠奪しているのはリュデイア王の財宝ではなくキュロスの財宝であることを指摘し，それを取り締まる方策まで献言した．こうして彼は暴行をやめさせるとともに，昨日までの敵キュロスの顧問となった．いくらかの自由を取り戻すと，彼は許可をえてデルポイに使を出し，神託を信じてこんな目にあったわが身の悲運を訴えた．デルポイは，運命の逃れがたいことと，5代前からの定業と，神託の「一帝国」の一人合点の解釈を指摘し，クロイソスもそれを納得したという．

キュロスがクロイソスを連れてペルシャに向かうと，リュデイア人が反乱をおこしサルデイスを逆包囲した．その報を聞いて，キュロスが苛酷な弾圧を指示しようとしたとき，クロイソスはリュデイアに軟弱化教育の導入を献言した．そうして民族は生きのびたが，精強なリュデイア王国は再建されることはなかった．

ペルシャに帰ったキュロスは，無数の運河と堅固な城壁に囲まれたバビロンを攻囲陥落させ，つぎに東部イランを制圧し，さらに遠くカスピ海東方のマッサゲタイ人への遠征にかかった．作戦計画を立てたうえで，クロイソスをわが子カンビュセスに委ねてペルシャに帰し，自分は渡河進撃した．クロイソスの策で第一戦に勝利をえたが，つぎの決戦で死んだ．わずか20年ばかりで彼は100年前のアッシリヤをしのぐ大帝国を建設していた．

キュロスの後を継いだカンビュセスはエジプトに進攻し，これを征服した．リビヤやキュレネーもペルシャに服属した．カンビュセスは，さらにエジプトを根拠に西方カルタゴや南方エチオピヤを伺ってエジプトに滞在した．偉大なキュロスの血を受けながら，彼は父王との比較評価を気にしつつ，次第に乱心，乱行に陥るようになった．クロイソスは王の側にあって，その乱心の犠牲となる危険を感じながらも，王に忠言を呈する自分の役割をつづけたらしい．しかしその最期は伝わっていない．

カンビュセスの留守中にペルシャではマゴス僧が王位の簒奪をはかり，王は急ぎ帰国の途上シリヤで死んだ，とされる．（わたなべ・ひろし　筑波大学社会工学系）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．